令和６年度
日本精神科医学会学術教育研修会
報　告

# 栄養士部門

須藤　康彦　　藤枝　信夫

2024年10月12，13日の二日間にわたり，岡山国際交流センターにおいて「晴れの国 岡山で笑って学んで考えよう 栄養士としてできること」をテーマに日本精神科医学会学術教育研修会 栄養士部門が開催された。

開会式に続き，「精神科医療を取り巻く環境の変化」と題し，山崎學会長による会長講演が行われた。山崎会長は，これまでの精神福祉行政の歩みを振り返りつつ，今後の課題について述べられた。特に，日本の精神病床の過剰問題や多剤併用の問題については，統計データを基に丁寧に反論がなされ，海外の基準で再集計した場合，日本の精神科医療が必ずしも入院中心で後進的ではないことが強調された。また，食料自給率や備蓄率など，食に関する多岐にわたる話題も取り上げられ，栄養士にとっての示唆も大いに含まれていた。

特別講演では「大人の発達障害の理解と支援を考える」と題し，慈圭会精神医学研究所所長であり，川崎医科大学名誉教授の青木省三先生による講演が行われた。青木先生は，時代とともに変化する患者層について述べ，特に大人の発達障害の支援において，神経発達症を脳の多様性の一つとして捉える視点を示された。発達障害を定型発達と比較して優劣を論じるのではなく，個性として捉えることの重要性が語られた。また，発達特性の濃淡や特性の強い人々の“生きづらさ”についても触れ，環境調整が治療効果を高めると述べられた。最後に，支え方次第で発達障害のある方も豊かな生活を送ることが可能であると述べられ，1934年にレオ・カナーによって世界で最初に自閉症と診断されたドナルド・トリプレット氏の幸福な一生について紹介された。

午後の部では，テーマである「笑い」に関連した文化講演として，岡山県出身の落語家 春風亭昇吉師匠が「落語家から学ぶ話し方のコツ―笑いと健康―」をテーマに講演された。昇吉師匠は，落語の「まくら」（本題前の世間話や小咄）には，聴衆の雰囲気をつかむことや話し手への親近感を育む効果があると説明され，聴き手が共感や安心感を持つことで初めて話を聞く姿勢になることを強調された。講演の後半では会場正面に高座が設けられ，プロの話芸，ことばの力を堪能することができた。

１日目の最後の講演は「あなたも院内外で発信できる管理栄養士になろう！―腎専門管理栄養士からのエール―」をテーマに，斎藤内科クリニック／Office SAKAI代表の坂井敦子先生が登壇された。坂井先生は，栄養士としてのキャリアとご自身の理念について語り，「守破離」の精神でキャリアを築く大切さを説かれた。日々の疑問が研究や改善のきっかけになることを強調し，人生において無駄な経験はないと，スティーブ・ジョブズ氏の“connecting the dots”の例を挙げて解説された。スティーブ・ジョブズ氏は大学生の頃，カリグラフィーの講義を受けたことがあったが当時はこれが何かの役に立つとは考えもしなかったが，10年後，コンピューターの開発をしていた時にカリグラフィーの知識が急によみがえり，美しいフォントを持つ最初のコンピューターの誕生につながったそうで，まさに人生において無駄な経験は何もないと結ばれた。

夜の懇親会では，岡山県のソウルフードであるえびめしやばら寿司などの料理がふるまわれ，参加者は岡山の味覚を存分に楽しんだ。また，毎年８月の第３土曜日に開催される「うらじゃ」祭りが体験できるアトラクションも企画され，参加者全員会場全体で輪になって「うらじゃ総踊り」を踊り，大いに盛り上がった。この懇親会を通じて，参加者間の交流も深まり，楽しいひとときとなった。

２日目は三つの講演が行われた。

最初の講演は「知って安心　正しい理解　食物アレルギー」と題し，川崎医科大学附属病院栄養部管理栄養士栄養主任の倉恒ひろみ先生が登壇された。まず，食物アレルギーの最近の話題として『食物アレルギー診療の手引き 2023』が厚労省から刊行され，食物アレルギーの定義そのものの見直しが進み，「原因食品であっても，量的安全と質的安全が証明されていれば摂取しても良い」という考え方が定着したと説明された。

次に，こども園（施設），病院での管理方法を具体的に提示された。最後に，最近のアレルギーの研究成果を報告され，正しい診断を行い「食べられる範囲」の判断を行い，必要最小限の食物除去の指導を実践することが大切であると述べられた。栄養士としては，食生活の評価・指導，保護者（患者）の不安への理解と支援が大切であり，その結果として適切な食物選択により，楽しく害がない食生活の実践が重要であると結ばれた。

次の講演は，こころホスピタル草津医療技術部栄養課課長の松本かずみ先生が「精神科 NST でつなぐ栄養管理―栄養士の役割―」と題し講演された。まず，こころホスピタル草津 NST の概要を説明された。こころホスピタル草津は，427 床，８病棟（精神科スーパー救急病棟，精神科慢性期病棟，認知症病棟，ストレス病棟）からなり，こころホスピタル草津 NST は 2006 年２月にソフト食の導入から稼働開始し，2012 年に全病棟で多職種参加型の栄養カンファレンスを立ち上げ，NST ラウンドを開始した。2020 年には訓練食（食事開始食）を導入し，現在に至っている。現在の食事形態は①開始食②ミキサー食③ソフト食④軟菜食の４段階に分かれており，NST ミールラウンドで食事の評価を行い，食事形態のマッチングを実施している。NST チームは NST チェアマン（内科医），摂食嚥下障害看護認定看護師（CN），NST 作業療法士，NST 管理栄養士で構成され，役割を分担している。2023 年度 NST 介入実績は 1,133 件であった。NST 管理栄養士は，総合的視野に立った栄養アセスメント，栄養ルートの提案／評価，患者の食事形態調整（お試し食準備），ラウンド全体の集計（毎月）等の役割を担っていると報告された。

最後の講演は，「当院における NST ラウンドの実際」と題し，こころホスピタル草津 NST チェアマン（内科医）の佐藤由美先生が，前講師と同じ施設であるこころホスピタル草津の NST ラウンドの実際を NST チェアマン（内科医）の立場から報告された。NST 業務は，NST 回診（週１回，多職種，昼食時），NST 検討会，NST 相談（スタッフや患者さんから）から構成されている。2023 年度 NST 介入件数は合計 266 件，2024 年度上半期は 166 件実施した。講演の後半は，個別症例（レビー小体型認知症，リフィーディング症候群，アルツハイマー型認知症，広汎性発達障害）に対する具体的な対応を提示され，最後に「当院の NST ラウンドはＦ２やＦ３が７割近くを占めている。多職種で連携することで，個別に食事の形態やカロリーを見直し，合併症の予防に努めている」とまとめられた。

以上，充実した内容の栄養士部門の研修会であった。担当してくださった岡山県支部長武田俊彦先生をはじめ岡山県支部の皆様にお礼を申し上げる。

（日本精神科医学会
学術教育推進制度学術研修分科会）